

二

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。（本文一部改変）

小さなショーウィンドウの片隅に、①そんなふうに書かれた金属製のプレートを見つけ、明里^{あかり}は足を止めた。

ノートくらいの大きさで、フレームスタンドに立てかけられている。ブロンズ色の板に銀色の文字が貼りつけられているが、ウィンドウの中が薄暗いので、よく見なければ何と書いてあるのかわからないくらいだった。

“おもいでの時修理します”

しかし何度確かめても、確かにそう書いてある。どういう意味だろう。その場に突っ立って、

明里は②首を傾げる^{かぶ}。

壊れてしまった思い出を、修理なんてできるものなのだろうか。そもそも思い出は、壊れたりするものなのか。

壊れるかもしれない。ああそうだ。明里にも壊れてしまった思い出がある。けれどもう、過ぎ去ったことだ。手の届かない過去を、修復できるとは思えない。

出窓くらいの大きさしかないショーウィンドウには、アンティークかと思われる③置き時計^{置き時計}がAと鎮座していた。天使の彫刻が周囲を飾る、時計というよりは美術品のように立派なものだ。

けれど、日常とは無縁のもの。明里はすぐに興味を失い、重いキャリーケースを引きずりながらまた歩き出した。

地図に目を落とし、このへんだと思いながら辺りを見回す。目につくのは下ろされたシャツターばかりだ。金物店や寝具店、などかつて商店だったと主張する文字がかすれたまま残っているが、明里が探している文字は見あたらない。

ようやく目当ての看板を見つけたのは、二、三度通りを行き来してからだった。白地に赤と青、三色の縞模様^{しま模様}になったポールとともに外壁にくっついているその看板は、蔦^{つた}の葉に覆われて隠れてしまいそうになっていたのだ。

間違いなく、“ヘアーサロン由井”と書いてある。安堵^{あんど}して、明里は建物に足を向けた。木造の一軒家だが、通りに面した一階の外壁だけは煉瓦^{れんが}ふう^{ふう}に塗られていて、手入れされた様子もない蔦が二階の屋根まで侵食している。

閉店して数年は経つ^たという、かつての理容店。ここが明里の新しい家だ。

あらためて周囲を確かめると、さっきの“思い出”の店のほぼ斜め向かいだった。

道をはさんで眺めれば、通りに並ぶ建物からさっきの店だけが浮いて見える。洋風の造りで二階の壁にはまるいステンドグラスの窓がある。しゃれた住宅街ならともかく、この、④寂れ

た商店街には似合わない。

駅からは少々離れた商店街だ。明里がここまで歩いて来る間も、ほとんどのシャッターが閉まっていた。商店街だとわかったのは、虹をイメージしたアーチ型の看板が、ほどほどの間隔で現れるからだ。

『津雲神社通り商店街』、とくすんだ文字は読みとれる。

鉄製のポールにはさびが浮かび、虹色のペンキもはげかかっている。乗用車が一台通り抜けるのがせいぜいだろう道幅だが、車どころか人通りもまだだ。

駅前の人混みは、みんな明里とは反対の方角へ向かっていった。新しく開発されたらしいマンション群やショッピングセンターへ導く色煉瓦の歩道を後目に、明里はでこぼこしたアスファルトの上を歩き、狭いガード下を抜け、そこからさらに人気のない方へと向かい、二十分ほど歩いた結果、たどり着いたのがこの商店街だった。

地方都市のベッタタウンとして発展中だという小さな町だが、この辺りはその恩恵にあずかずに衰退の一途をたどっているようだった。

子供の頃の記憶とは、ずいぶん違っていた。もつとにぎやかで、色とりどりの看板や造花の飾りにあふれていた。何度か行った駄菓子屋さんがどこだったのか、もうわからない。花火を買ってもらったおもちゃ屋も、たぶんもうないのだろう。

それでも明里は、商店街が寂れてしまったことを残念に思うより、⑤むしろほっとしていた。昔の面影がないからこそ、ここへ来ることを許されるような気がしている。

あの商店街はもうどこにもなく、あるとき小さかった明里も、もうどこにもいない。きっと誰も、自分のことをおぼえていないから、小さな嘘くらい許されるのではないだろうか。

高い空も、湿気の少ない風も秋の気配だが、午後の日差しはまだまだきつく、理容店の入口まで歩いていきながら明里は額を片手でぬぐおうとし、今日は B とメイクをしていたことを思い出して手を止めた。

引越しの日だというのに、同じ店で美容師として働いていた同僚にヘアメイクのモデルを頼まれた。練習台だが、近く本社のコンテストに出るために研究中だったのだ。時間の都合で、明里は奇抜なヘアメイクを施されたまま電車に乗って、この町へやってきた。

たまにすれ違う人が、さつきから⑥怪訝な目でこちらを見ていく。旅行者みたいなキャリーケースのせいだと思っていたが違うようだと、いまさらながら気がついて、情けない気持ちになった。

問一 傍線部①「そんなふう」とはどのようなふうに書かれていたのか。文中から十一字で抜き出さない。

問二 傍線部②「首を傾げる」について、明里はどのような心情で首を傾げたのか。適切でないものを、後の選択肢から選り記号で答えなさい。

ア 悩んでいる イ 考えている ウ 不思議に思っている エ 困っている

問三 傍線部③「置き時計」について、これは明里にとってどのようなものを感じているか。文中から十字以内で抜き出さない。

問四 空欄A・Bに当てはまる言葉をそれぞれ次の語群から選り答えなさい。

語群

ばさっ	ざくっ	ぽつん	ふにゃっ	きらり	もっさり	しっかり
-----	-----	-----	------	-----	------	------

問五 傍線部④「寂れた商店街」について、なぜ寂れているのか。文中の言葉を用いて、「…ができたから」につながるように答えなさい。

問六 傍線部⑤「ほっとしていた」とあるが、なぜか。文中の言葉を用いて説明しなさい。

問七 傍線部⑥「怪訝な目」について、なぜそう見られたのか。文中の言葉を用いて答えなさい。

三

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

日本人は「①AはBである」と言い切ることがあまり好きでない。ことに「ある」というセンテンスが重なるときは、なんとかして、繰り返しを避けたい気持ちをはたらく。変化をつけたい。さしずめ手近なところに“であろう”がある。それで言い換えよう、という心理で“であろう”が生まれる。推量などではない。「AはBである」というのと「AはBであろう」というのはほぼ同じ意味である。

それを違うとするのは論理的であり、同じだと思うのは修辭的である。

（中略）

日本は大昔から、修辭ということを意識しないまま、修辭的であった。その分、いわゆる論理とは縁がうすかった。形式論理の考えは明治以後、欧米文化に接触してはじめて存在を知り、日本人の劣等感のひとつになった。

②日本文化の特色は、相手尊重にある。自己中心の文化を第一人称文化と呼ぶならば、日本文化は第二人称文化である。自分を抑えて相手を立てる。第一人称をふりまわすようなことばはしたくない、傍若無人のこととして嫌われる。敬語が発達するのは自然の成り行きである。“であろう”が好まれるのも、相手への※顧慮こりよに根ざしていて、かすかながら敬語の心に通じるところがある。

白と黒をはっきりさせれば、明快であるが相手にとって、第三者にとっても、解釈の余地がない。自分の出る幕がなくてはおもしろくない。無視されているように感じる。わかり切ったことを言われると、ヒトをバカにするな、という氣持をいだくのが、もののわかった人である。

だいいち、Aしか認めないのは自然の理にも反している。自然は多色である。黒白はむしろ極端なケースである。

色どりにしても、赤とか青とかを独立して認めるのもいくらか単純である。もうすこし洗練された感覚は混合色を※賞あづかでる。渋い美しさは複合色によってあらわされる。幼児の絵は色を重ねることを知らない。複合色の典型が玉虫色である、と言ってよいだろう。白とか黒、赤や青は、だれがどう見ても、それ以外の色になることはないが、玉虫色だと、見る人、見る角度によって色合いが変わる。それをおもしろいと感じるのは円熟した社会の大人の感覚である。対立する二つの勢力はなかなか妥結点を見出せない。白か黒かを争えば、いつまでたっても話し合いはまとまらないだろう。互いに自分の考えを託することのできる妥結は、多く玉虫色である。

双方で見方が異なっているまま、ある共通理解が成立する。③そういうところで争いを回避できる。相手尊重の心がいくらかでも存在しないところでは玉虫色の合意は得られない。

絶対、純粹をつきつめていけば、争いになるのは理の当然である。醜い競争を避けるには、互いに、すこしのウソを認める、そのウソを自分の都合のよいように解釈することで対立、敵対を解消させるのは社会的英知であるといってよい。妥協を不潔と見るのは書生論である。

玉虫色の美しさを認めるのは、いろいろな経験をした社会である。歴史の浅いところでは、評価されないのは是非もない。

（外山滋比古「聴覚思考」より）

〔語注〕

※顧慮…ある事をしつかり考えに入れて、心をくばること。

※賞でる…見た目の美しさ、素晴らしさに感心して楽しむ。心から素晴らしいと思うこと。

問一 傍線部①「AはBである」と同じ意味で用いられている文を七字で抜き出さない。

問二 傍線部②「日本文化の特色」とはどういうことか。十五字以内で説明せよ。

問三 Aに入る語句を、これより前の本文中から抜き出して答えなさい。

問四 傍線部③「そういうところ」が指す内容を、解答欄に合うように本文から三十字以内で抜き出さない。

問五 この文章から読み取れる適当なものを、後の選択肢から選んで答えなさい。

ア 対話において白か黒かを決めることは、物事が円滑に進むので必要不可欠である。

イ お互いの妥結点を見出すためには、白と黒よりも玉虫色が重要となる。

ウ 自分の都合のよいように解釈するためには、対立や敵対は避けられない。

エ 玉虫色の美しさを認めることは、歴史の浅さを認めるということである。

四

次の古文を読み、後の問いに答えなさい。

鳥羽院の時代、平忠盛が初めて昇殿を許された。殿上人たちはこれをそねんで節会の際に闇討にしようとし、さまざま嫌がらせをしたが、忠盛の機転と、忠実な郎等のおかげで難を免れ、かえって鳥羽院に認められた。これはその後の話である。

※其子どもは、諸衛の佐になる。昇殿せしに、殿上の a まじはりを人きらふに及ばず。

其比忠盛、備前国より都へのぼりたりけるに、鳥羽院、「①明石浦はいかに」と御尋ねあり

ければ、

A 有明の月も明石のうら風に浪ばかりこそ寄るとみえしか

と申したりければ、御感ありけり。此歌は、金葉集にぞ入れられける。忠盛又※仙洞に最愛

の※女房をもッて、かよはれけるが、ある時、其女房の局に、妻に月出したる②扇を忘れ

て出でられたりければ、b かたへの女房たち、「是はc いづくよりの月影ぞや、出所おぼ

つかなし」なンド、わらひあはれければ、彼女房、

雲井よりただもりきたる月なればおぼろけにてはいはじとぞ思ふ

とよみたりければ、いとどあさからずぞ③思はれける。薩摩守忠度の母④是なり。似るを

友とかやの風情に、忠盛の※すいたりければ、彼女房も※優なりけり。

(「平家物語」)

〔語注〕

※其子ども…平忠盛の子ども

※仙洞…院の御所

※女房…宮仕えをする女性

※雲井…雲のあるところ

※すいたり…風流がある様子

※優…優雅

問一 二重傍線部 a 「まじはり」 b 「かたへ」をそれぞれ現代仮名遣いに直しなさい。

問二 二重傍線部 c 「いづく」の意味を答えなさい。

問三 傍線部①「明石浦はいかに」を現代語訳しなさい。

問四 和歌 A について次の(1)と(2)の問いに答えなさい。

(1) 「有明の月」とはどのような月のことか。次のア～エから適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 明け方まで残っている月 イ 日没後すぐの月
ウ 夜に煌々と光っている月 エ 夜明け前に出ている月

(2) この歌は誰が詠んだのか、文中から抜き出しなさい。

問五 傍線部②「扇を忘れ」たとあるが、忠盛はどこに忘れて行ったのか、最も当てはまるものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 殿上 イ 鳥羽院 ウ 女房の局 エ 雲井

問六 傍線部③「思はれける」の現代語訳として、最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 愛した イ 嫌った ウ 呆れた エ 喜んだ

問七 傍線部④「是なり」とあるが、誰のことか、文中から五字で抜き出しなさい。

五 作文

最近のニュースを一つ取り上げ、内容を説明したうえで、あなたの意見を述べなさい。

1 原稿用紙の書き方に従うこと。

2 題名・氏名は原稿用紙のマスの中には書かないで、始めの行から書きだすこと。

3 字数は百五十字以上、二百字以内とする。

4 できるだけ漢字を使って書くこと。

C	B	A
1	1	1
鼻	泥	しょうにん
2	2	2
月	猶予	なごり
3	3	3
ア	不都合	まさつ
4	4	4
ア	太陽	せいじゃく
5	5	5
イ	季節	とうとつ

19

問一	お	も	い	で	の	時	修	理	し	ま	す	問二	エ
問三	日	常	と	は	無	縁	の	も	の	。			
問四	A ぽっん			B しっかり									
問五	新しく開発されたいマンション群やショッピングセンター										ができたから。		
問六	ここへ来ることを許されるような気がしているから。												
問七	奇抜なヘアメイクをしていたから。												

三
12

問一	A	て	相	問四 双方で見方が異なっているまま、ある共通理解が成立するところ。	問五	イ
は	B	手	を			
で	あ	を	立			
ろ	う	て	る			
問二	自	こ	と			
分	を	。	問三			
抑	え	白と黒				

四
19

問一	a まじわり	明石浦はどうだったか（どうか）	b かたえ	問二	どこ							
問三	問四		問四	(1) ア		(2) 忠盛						
問五			ウ	問六		ア	問七	最	愛	の	女	房

五
20

[illegible]